

ペンテコステの日に、十字架のメッセージを聞いた人々は、心刺され、「救われるために私たちはどうしたら良いですか？」とペテロに問いました。それに対してペテロは、「悔い改めて、主の名によってバプテスマを受けなさい」と命じるのです。それは人々をして、彼らの罪が赦されるため、また賜物として聖霊を受けるためでした。そこでこのことばを信じた人々は、バプテスマを受けます。そして、ここから使徒たちの教えと交わりに、主の晩餐と祈りに専念するという聖霊に導かれた歩みが、彼らのうちで始まって行くのです。

そのような信仰の歩みを続ける人々のうちには、主への恐れが生じ、使徒たちによって不思議としるしが行わたことを私たちは見ましたが、今日の箇所は、まさに、その不思議としるしがきっかけとなり、キリストが証されるというところへ、話が展開していきます。もう一度、1-8 節を見ます。

「ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上って行った。2 すると、生まれつき足のなえた人が運ばれて来た。この男は、宮に入る人たちから施しを求めるために、毎日『美しの門』という名の宮の門に置いてもらっていた。3 彼は、ペテロとヨハネが宮に入ろうとすることを見て、施しを求めた。4 ペテロは、ヨハネとともに、その男を見つめて、『私たちを見なさい』と言った。5 男は何かもらえると思って、ふたりに目を注いだ。6 すると、ペテロは、『金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい』と言って、7 彼の右手を取って立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、8 おどりが上がってまっすぐに立ち、歩きだした。そして歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮に入って行った」。

この後の 4 章 22 節を見ると、ここで癒された人が 40 歳ほどであったことがわかります。皆さん、どうぞイメージしてみてください。彼は「生まれつき足のなえた人」ですから、これまで一度も歩いたことがないのです。しかも、40 年間もです。そんな彼に突然、癒しがもたらされたわけですから、一番驚いたのは彼自身ではなかったでしょうか。「毎日」とあるように、この日も施しを求めて、そこに置いてもらっていた彼は、ペテロに「私たちを見なさい」と言われた時も、「何かもらえると思って」いました。ですから、まさか自分の足が癒され、歩けるようになるとは思いませんでした。

でも、彼はペテロがもっていたもの、つまり、それはお金ではなく、主イエスの御名によって癒されます。ペテロの右手を受けて、彼は立ち上がり、歩きだすのです。そして、はねたりしながら、神様を賛美しました。この様子は、誰もが容易にイメージできると思います。それほど大きな喜びと感謝が彼に与えられたのです。このことを通して、彼は神様を体験しました。主の偉大な力を身をもって知ったのです。ですから、神様を賛美しました。でも、話はそこで終わりません。当然、彼自身も終わらせたくなかったことでしょう。彼は、自分を立たせてくれたペテロたちについて宮の中に入って行くのです。

皆さんは、この人が、ペテロたちの後を黙ってついて行ったと思いますか？9 節「人々はみな、彼が歩きながら、神を賛美しているのを見た」のです。つまり、人々は彼が歩いている姿を見ただけではなく、彼が神様を賛美する姿も見ただけです。それはきっとあのダビデが主の箱を運び入れる時に、神様の前に喜び踊った時のように、彼も全身で神様を賛美したことでしょう。当然そういうのは目立つわけで、周りにいた人々は何が起こったのかと集まってきました。そして、この人が毎日「美しの門」の前で施しを求めていた人だとわかると、今度は彼らが驚くのです。そんなこと普通ではあり得ないので、当然の反応といえるでしょう。そして、さらに人々が集まってきました。

そこで人々の注目は、癒されたその人から、彼がいっしょにいたペテロたちへと移ります。ここからペテロのメッセージが始まるわけです。12 節「イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。…」ここから、人々がどのような目でペテロとヨハネを見ていたかが伝わってきます。

私がここで驚いたのは、ペテロのことばです。「なぜこのことに驚いているのですか」。皆さん、あなただったら、驚かないですか？こんな出来事を前に、むしろ、驚かない人の方が驚きです。でも、ペテロがそう言っ

たのは、これが彼自身の力や信仰深さによるものではなく、神様のみわざであることを証するためでした。つまり、このことは、人にはできないが、神様にはおできになるという意味で、彼はそのように語ったのです。その続きの 13-15 節 を見ます。

「アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち、私たちの父祖たちの神は、そのしもペイエスに栄光をお与えになりました。あなたがたは、この方を引き渡し、ピラトが釈放すると決めたのに、その前でこの方を拒みました。14 そのうえ、このきよい、正しい方を拒んで、人殺しの男を赦免するように要求し、15 いのちの君を殺しました。しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です」

ペテロはここでも主イエスの死と復活について語っていますが、主を拒み、殺した者の主語は、やはり「あなたがた」です。この時の群衆は、最初のメッセージを聞いた人々とは異なります。でも、ここでも主イエスを殺したのは、メッセージを聞いていた人々でした。ペテロは明らかに人々が有罪だと宣告しています。でも、同時に、神様は主をよみがえらせ、自分たちはそのよみがえられた主の証人であると証するのです。

そして、16 節へと続きます。「そして、このイエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに、あなたがたがいま見ており知っているこの人を強くしたのです。イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの目の前で完全なからだにしたのです」。ペテロは、この生まれつき足のなえた人を強くしたのは、誰（何）だと言っていますか？何が、この人のからだを完全なからだ (Perfect Health) にしたのでしょうか？

ペテロは言います。「このイエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに」と。またこうも言います。「イエスによって与えられる信仰が」と。つまり、人々が拒んで殺したイエス、でも、神様が栄光をお与えになり、死よりよみがえらされた主イエスが、その名を信じる信仰のゆえに彼を癒したと言うのです。「イエスの御名」とは、主イエスご自身のことですが、栄光を受けた主が、この人を癒したという部分はわかります。でも、その名を信じる信仰とは、いったい誰の信仰のことでしょうか？

それは「ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい」と命じたペテロの信仰のことですか？もちろん、ペテロのうちには主への信仰がありました。では、主の御名を信じる信仰をもっていたのは、ペテロだけですか？癒された人には、信仰はなかったのでしょうか？彼が自分から、癒しを求めてペテロに声をかけたのではない、という点からすると、そこに彼の主への信仰を見るのは難しいと思います。でも、彼には主の御名を受け入れる信仰がありました。つまり、ペテロによって自分の身に成されようとしていることを受け入れるという信仰があった、ということができるとは思いませんか？

というのも、7 節の「彼の右手を取って立たせた」の後を見て下さい。「するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、8 おどりが上がってまっすぐに立ち、歩きだした。…」最初にも見ましたが、彼は40年間、自分の足で歩いたことのない人です。「生まれつき」そのような状態だった彼が、ペテロに右手を取って立たされたからといって、自分で立つことをあなたは当然のこととして期待しますか？私だったら、戸惑ったのではないかと思います。それこそ立つことに恐れを覚えてもおかしくないと思うのです。

つまり、彼には、この主の招きを拒むこともできたということです。右手を取って立たせようとするペテロに対して、「そんなこと無茶だ！あり得ない。私のほしいのはお金だ」といって、その手を振りほどくこともできた。でも、彼はそうしなかった。むしろ、その招きに応じて、自分の足でまっすぐに立つのです。彼は主の御名を受け入れました。これが「イエスによって与えられる信仰」だと私は思うのです。その後どうなるのかわからないというのは、恐ろしいことです。でも、主から与えられる約束、その恵みを感謝して受けとること、それが神様が私たちに求めておられる信仰、イエスによって与えられる信仰ではないでしょうか。

私はここに「なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか」とペテロが言った理由を見ます。主への信仰によって「主の名によって歩きなさい」と命じたのはペテロです。でも、彼を癒したのは、ペテロではありません。ペテロの力でもなければ、彼の信仰深さのゆえでもありません。それは、力のないペテロを、つまり、主のために死をも覚悟しているといいながら、でも主

を三度否んだペテロを、初めから選び、ご自分の血（死）をもって赦された主、また復活後に彼に現れて約束の御霊を注ぐことでご自分の証人とされた主イエス（その御力）によるです。

ペテロは、そのことを知っていました。だから、「イエスによって与えられる信仰」（The Faith that is through Jesus）というのです。この後、この癒された人が、自分がいやされた理由を自分の力や信仰深さのゆえだと言って、自分自身を誇ったと思いますか？もしそうであったなら、彼のうちから神様への賛美は出てこなかったことでしょう。彼は知っていたのです。このことが、自分から出たことではなく、主から出たこと、つまり、主の一方的なあわれみと恵みによってなされたことを。それゆえに、彼は神様をあがめました。

17-21 節「ですから、兄弟たち。私は知っています。あなたがたは、自分たちの指導者たちと同様に、無知のためにあのような行いをしたのです。18 しかし、神は、すべての預言者たちの口を通して、キリストの受難をあらかじめ語っておられたことを、このように実現されました。19 そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい」。

ここでもメッセージの中心は、悔い改めと信仰です。人々に罪を示すのは、それを残すためではありません。赦すためです。なぜなら、神様は、こうなることを知っておられたからです。「神は、すべての預言者たちの口を通して、キリストの受難をあらかじめ語っておられた」。ということは、神様は、キリストの受難を通して、人々に対する救いのご計画をもっておられたということです。そして、それこそ、すべての人が悔い改めと主への信仰によって、神様がアブラハムを通して約束されていた祝福を受けるというものでした。その約束の子孫としてのキリストによって、罪の呪いから解放され、祝福を受けるということです。

ペテロは、メッセージの中で主のことを「しもべ」（13 節、26 節）と呼び、キリストの受難（18 節）を語っていますが、同時に「きよい、正しい方」（14 節）、「いのちの君」（15 節）とも呼んでいます。アブラハム、イサク、ヤコブの神が、栄光をお与えになられたイエス、この方がしもべとして苦しみを受ける必要は、どこにありましたか？なぜきよく、正しい方、いのちの君が、汚れた、不正な者たちによって殺される必要があったのでしょうか？それは主が、罪人である私たちのいっさいの罪を負うことで、私たちに対する神のさばきを代わりに受けて下さるためです。それによって私たちには、罪に対するさばきではなく、赦しがもたらされるために、主は十字架にかかって死んで下さいました。そして、死よりよみがえって下さったのです。

ですから、20 節に「それは、主の御前から回復の時に来て、あなたがたのためにメシヤと定められたイエスを、主が遣わしてくださるためなのです」とあるように、今は回復の時、恵みの時です。主の御名を信じる者は、みな救われます。ご自分の名を呼ぶ者を主が暗やみのこの世から救い出して下さるからです。あなたを救うのは、あなた自身の力でもなければ、あなたの信仰深さでもありません。あなたにはそんな力はない。どんな時にも、何があっても神様を信じ通す信仰深さはないのです。

でも、だからこそ、神様は愛する御子イエスを、ご自分の御心を行う者（しもべ）として、この世に遣わされました。彼の成し遂げる十字架の贖いのわざと復活のいのちによって、赦しといのちの道が私たちに与えられるためです。主イエスが信仰の創始者であり、完成者と言われる理由はそこにあります。この方から目を離さずにいるなら、どんな時にも望みを失うことはありません。なぜなら、私たちの救いは、私たち自身の義（正しさ）にではなく、主にかかっているからです。そして、主は、彼に救いの望みを置く者を立たせて下さいます。私たちは、この主に心からの感謝と賛美をささげようではありませんか。主を誇ろうではありませんか。